奨励賞

【外国語】

学習世界を広げる子どもたち
～魔法のタブレットをたずさえて～

愛知県尾張旭市立東栄小学校
鈴木 由季子（すずき ゆきこ）

実践の概要

本研究では、小学校の外国語科の授業において、学習を深める時間「Self-study Time」を設定し、タブレット端末の利点を生かした活動に取り組み、その結果、今の時代に生きる子どもたちがタブレット端末をたずさえて、学習世界をどんどん広げていく実践事例について報告し、その成果と課題について考察した。

論文内容の紹介

1 研究の内容と実際

「Self-study Time」の設定

タブレット端末を活用し、毎授業の10分間ほどに、以下の3つの活動を行った。

①「授業振り返りTime」

本時の授業での、新しい学びや自分の成長を振り返る時間。できるようになったことや、解決できなかったことを振り返らせ、今の自分の学習状況を把握させ、次活動②につなげた。

②「復習Time」

今の自分に必要な復習を各々で行う時間。授業の中で分からなかったことを友達や指導者に尋ねたり、もう一度聞きたい音声をタブレット端末のカメラ機能を利用し、QRコードを読み込むことで、自分の学習ペースで繰り返し聞いたりした。子どもたちが自分で選択して学習を進め、個々の主体的な学びの姿勢を尊重することができた。

③「課題解決Time」

プレゼンテーションで使いたい英語表現をタブレット内のアプリを使って調べたり、写真やイラストなどの資料でスライドを作成したりして、より自分の表現が伝わる内容になるように工夫するなど、個々の課題を解決する時間。プレゼンの良い例の動画を視聴したり、伝えたい内容の英語の音声をタブレット端末のスピーカーに耳を寄せて繰り返し聞いたりして、練習する姿などが見られた。

2 タブレット端末を使った実際の活動事例

①知りたいことはオンデマンドで

授業中にタブレット端末を机上に常備することで、知りたいことはすぐに調べることができた。指導者や友達には尋ねにくいと感じている子どもも、タブレットで調べることは、遠慮なく率先して行う様子が見られた。タブレット端末を通じて、教科書以外の広く深い情報をすぐに得ることができるようになり、子どもたちは興味の赴くほうへどんどんと世界を広げていくことができた。

②プレゼンテーションを豊かに分かりやすく

プレゼンの資料はタブレットのアプリケーションを使って発表スライド資料を作成し、それを教室のテレビに映し出して示しながら行った。スライド資料には、写真やイラスト、文字などを配置し、聞き手によりよく伝わるように工夫していた。どの子どもの作成資料も量的に増え、伝える内容も豊かになり、より英語を身近に使う様子が見られた。

プレゼンテーションの様子

3 おわりに

タブレット端末が一人一台あるからこそ、「Self-study Time」を設けることができ、プレゼンテーションも豊かな表現で行うことができるようになった。タブレット端末は、学校、教科書、国、時を超えて、子どもたちの学習世界をさらに大きく広げるものとなった。タブレット内にそれぞれの課題を解決できるヒントがあふれ、どんどん新しい情報を獲得し、自らの知識として蓄えることができた。そんな魔法のタブレットをたずさえた子どもたちにとって指導者は、教える立場からファシリテーターの役割へ替わる時がやってきた。

奨励賞

【特別支援教育】

支援を要する児童の「教育的ニーズ」への適切な指導と支援の充実

東京都足立区立千寿桜小学校
富松（とみまつ） 里子（さとこ）

実践の概要

本研究では東京都足立区における特別支援教室において、既存の「実態把握票」を生かし、「ルーブリック」の手法を加え、さらに複数の情報を集約した「特別支援教室　児童支援・評価シート」を新たに作成した。そのシートを効果的に活用することで、特別支援教室での指導目標が明確になるとともに、指導体制を確立できるほか、一人一人の「教育的ニーズ」へ適切な指導と支援を充実させることができた実践の報告である。

論文内容の紹介

1 研究の目的

本校では平成28年度に特別支援教室が開室し、５年が経過した今、特別支援教室利用児童数が開室当時から比べると3.5倍に増加している。利用児童数が増加しているため、すべての児童の実態把握、支援策を検討する時間や機会の確保が不十分である。しかし、限られた時間の中で迅速かつ的確に児童の実態を把握し、一人一人の「教育的ニーズ」に応じた指導をしていかなければならない。そこで、足立区が採用している「実態把握票」に「ルーブリック」の手法を加えるなどして、新たに「特別支援教室　児童支援・評価シート」を作成した。これには実態把握票で出した結果に加え、通院歴、療育歴、服薬など複数のデータが一度にすべてわかるようになっている。これを活用することで巡回指導教員がより効果的な指導が可能となり、臨床発達心理士との情報共有や助言などが焦点化され、一人一人の教育的ニーズに応じ、より適切な教育的支援を行うことを目的としている。

2 「実態把握票」と「特別支援教室　児童支援・評価シート」

足立区の「実態把握Ａ票」では「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」「不注意」「多動･衝動」「こだわり」「社会性」「対人関係」「情緒」の12領域から構成される（次ページの図に示したものは一部抜粋）。それをそれぞれの立場からの観察結果を数値化し、平均値を出す。それをレーダーグラフに表し、「特別支援教室　児童支援・評価シート」に反映する。

45ページのシートは自閉スペクトラム障害の傾向がみられる児童のシートを一部抜粋したものであるが、他にも注意欠陥・多動性障害の傾向、

学習障害の傾向がある児童のものもある。

このシートには学期ごと及び、入室時の情報などを残すことができる。よって継続的な変容が視覚化され、個の教育的ニーズがどこなのかがわかるため、指導目的や指導方法が明確になる。

3 研究のまとめ

特別支援教室を利用する児童が増えてきているが、一人当たりの利用時間数等が少なくなる現実がある。より的確な実態把握と共通理解、今後の支援の在り方を情報共有するためにはどのようにしていくことが必要なのかを追求してきた。あらゆるデータを集約できる「特別支援教室児童支援・評価シート」を活用することで個の「教育的ニーズ」が明確化した。短期目標においては「特別支援教室で学ぶこと」として学期ごとに「めあてと手立て」に提示し児童と一緒に考えることで、自身の苦手とするところを理解し、主体的に学ぼうとする様子も窺えた。結果、レーダーグラフの凸凹に広がりが見え、改善・克服してきていることが確認できた。

校内において教職員間のコミュニケーションを高め、情報共有することで「特別支援教室　児童支援･評価シート」がさらに充実したものになった。より的確に迅速に対応し、一人でも多くの児童や保護者のニーズに応えられるよう、特別支援教室専門員として専門性を高め、特別支援教室の円滑な運営を行っていく。

○申請時　　○継続・終了時（該当項目を○で囲む）

令和　　年度　実態把握票　A票

作成月日

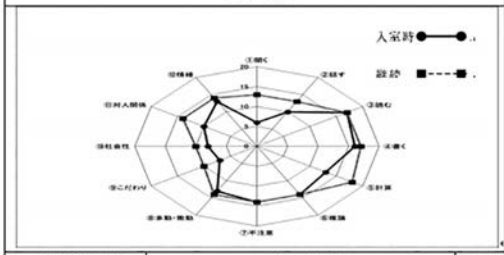
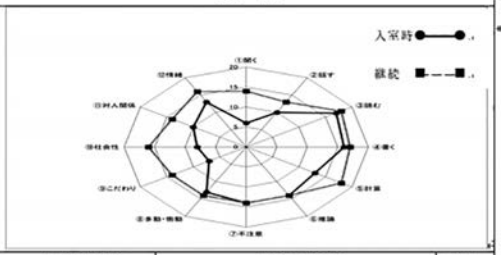
学校名　　児童氏名

記入者名

領域[ ]↑合計点	項目	評価基準 あてはまる	だいたいあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない	点数 評価基準をもとに入力	行動観察記録
①聞く	音の聞き間違いや聞き逃しがない。	5	4	3	2	1		※領域内に1ないし2の評価項目がある場合には、特性や手立てを担任、SC、コーディネーターが協議の上記入する。
	集団場面での指示の聞き取りができる。	5	4	3	2	1		
	話を聞いていないと感じられることがある。	1	2	3	4	5		
[0]	聞いたことを一定時間覚えていられない。	1	2	3	4	5		

《足立区　実態把握票Ａ票》一部抜粋

プロフィール票 と 短期目標

前　期			後　期		
					
短期目標	評価項目	評価	短期目標	評価項目	評価
新しい環境に慣れる。	・分からないことは先生に聞く。	A	自信を持って行動できる。	・分からないことは確認する。	A
	・友達と積極的に関わる。	A		・自分で判断して行動する。	
自分の気持ちに気づくことができる。	・困ったことがあったら相談することができる。	A	係・委員会活動を忘れずに取り組むことができる。	・やらなくてはならないことを整理し、持ち物や活動を確認し忘れないよう工夫できる。	B
	・自分の気持ちも相手の気持ちも大切にする。	A			

A：定着している　B：概ね定着しているがもう少し時間を要する　C：定着がみられない

《自閉症スペクトラム障害の傾向がみられる児童の「特別支援教室　児童支援・評価シート」》一部抜粋

奨励賞

【国語】

相手や目的に応じて、自分の考えを書いて表現する学習指導の工夫

―「読むこと」の教材文における筆者の書き方の工夫を自分が表現する文章に生かす学習を通して―

広島県海田町立海田小学校
名和原（なわはら） 奈穂子（なおこ）

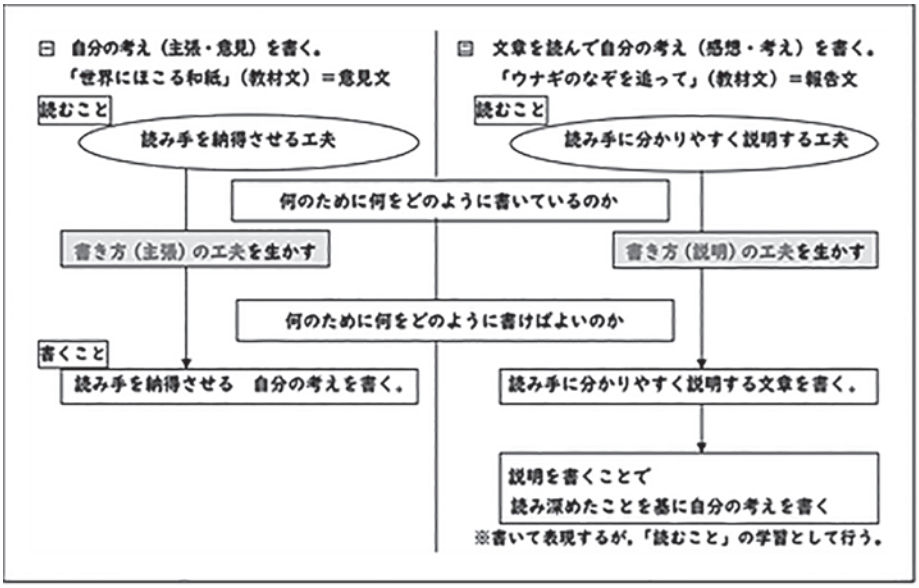
実践の概要

本研究は、相手や目的に応じて、自分の考えを書いて表現する力を育む国語科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、「相手や目的に応じて、自分の考えを書いて表現する力」を「『何のために書くか』『読み手は何を知りたいのか』に相応した自分の考えを書いて読み手に伝えること」とした。この力を育むために、説明的文章を読み、書かれた文章が「何のために何をどのように書いているのか」を考えることで、書き手の工夫が読み手にどのような効果を与えているのかを考え、その工夫を自分が書き手として、「書く目的に相応するためにはどう書けばよいか」「読み手の知りたいことに相応するためにはどのように書けばよいのか」考えることにつなげていく学習単元を計画した。

論文内容の紹介

1　「読むこと」の教材文における筆者の書き方の工夫を自分が表現する文章に生かす学習について

「筆者の主張が明確な意見文」と「筆者が研究調査したことを報告する報告文やものごとを説



明する説明文」、この２種類の説明的文章の特質に合わせて、自分の考えを書いて表現する力を育むための国語科学習指導の工夫を行った。

文章が「筆者の主張が明確な意見文」の場合、自分の考えが相手に伝わるように書くという目的と対になる。一方、「筆者が研究調査したことを報告する報告文やものごとを説明する説明文」の場合、筆者の書き方の工夫と自分の考えが相手に伝わるように書くこととは対にならない。そこで、自分の考えを書いて表現する前に、筆者の書き方の工夫を生かして、説明する文章を書く活動を取り入れ、筆者の書き方の工夫を自分が表現する文章に生かせるようにした。

2　授業実践を通して

説明的な文章を書き手と読み手を往還しながら読み深めていくことは、自分の考えの書き表し方を知ることにつながった。それゆえ、自分の考えを書くことに有効であった。

①自分の考えの書き方「根拠・主張・理由付け」について学ぶことで、自分の経験や既習の知識を関係付けて根拠を基に自分の考えを詳しく書くことができるようになった。

②授業前は文章を読み疑問のみ書いていたが、筆者の立場で考える場面を設定することで、文章の裏にいる書き手の存在を意識し、書き手と読み手を往還しながら文章を読むことができるようになった。その結果、筆者の立場に寄り添い文章を読めるようになった。

3　成果と課題

説明的文章で自分の考えを書くことが難しい理由を問うと「説明的文章は、分かったことしかなく、自分の考えが思い浮かばない」と答える児童がいた。その言葉から改めて説明的文章を学ぶことの意義を考えることができた。指導する側がどんな自分の考えを何のために書かせるつもりなのか明確に説明できるか。伝えたい自分の考えがあって意見を伝える文章を書くことと、与えられた文章から自分の考えを伝えるために文章を書くことは全く異なる。しかし、そこには相手がいて目的があるという共通点がある。常に「相手や目的に応じるためには」と考えさせる工夫が必要だと分かった。教材文の特質に応じた言語活動の工夫を考えていく必要がある。